

揺らぐ個人主義

卒業生に
贈る
言葉



大谷 實
総長

卒業生の皆さん、ご卒業、誠におめでとうございます。長年のご努力、ご苦勞が実って、それぞれの課程を無事修了し、新たな人生行路の門出を迎えることができましたことに對し、学校法人同志社を代表して、心からお祝い申しあげます。皆さんのご卒業に際して、現代の社会生活の根元といわれています個人主義についてお話しをし、ご卒業の饒（はなむけ）の言葉にしたいと思います。

日本の国のかたちと国民としての生き方を決めた現在の日本の憲法は、ご承知のように一九四七年に制定されました。この憲法は、それまでの国家主義、天皇中心の考え方を一八〇度転換して、個人主義または個人尊重の原理を標榜しました。「すべて国民は個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に對す

る国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、国政の上で最大の尊重を必要とする」(憲法十三条)と宣言したのです。

個人主義とは、改めて申すまでもなく、国や社会あるいは集団は個人の集合にすぎないから、国や社会の利益を優先させてはならず、何よりも具体的な一人ひとりの幸福を最優先させなければならないという考え方をいいます。言い換えますと、人間社会におけるあらゆる価値の源は個人にあるとし、何よりもこの個人を大切にし、尊重しなければならいとする原理であります。そして、この個人主義は、戦後の社会の価値の基準であるとされ、立法、行政、司法といった国政の上で最大限に尊重されるべきであるときれてきました。

こうして、私たちの社会は、一九四七年に憲法が制定されて以来、個人主義を基礎とする社会になったのですが、それから五十余年を経過した今日、本当の意味での個人主義は社会に根づいたのか問われています。

憲法は、先程触れましたように、個人の尊重を標榜しましたが、尊重されるべき個人の生き方、あるべき行動の仕方については何も触れていません。そのためか、戦後の国民生活を見ると、例えば「国家」が「会社」に変わっただけで、依然として個人の生き方は戦前と変わっていない、あるいは、自分のしたいことよりも集団や世間体を気にして行動するといった生き方が支配してきたように思われるのです。

個人主義の人間像がどういうものであるかは哲学上も論議のあるところですが、一人ひとりが人格としての価値を有しており、したがって、一個の人格者としての主体的な決定、つまり自己決定を最大限尊重するということが個人主義の内容であるという点では、今日、異論はないものと考えます。憲法が「幸福追求に對する国民の権利」と規定したのは、まさに、自ら幸福と考える生き方または人生の目標を自らの

意思で決め、追求することを最大限に尊重するという意味だと思うのです。個人主義は一人ひとりが主体的で独自の生き方をする点に特徴があるのに、戦後の日本社会ではそのような自覚が一般国民に乏しく、その点では戦前と余り変わっていないのではないか。個人主義は、今日でも十分に根づいていないといわれるゆえんです。

一方、個人主義そのものを問題とする意見も目立ってきています。この数年間、少年犯罪や凶悪犯が増えるとともに殺伐とした事件が相次ぎ、また、子供の無気力や家庭の崩壊現象が現れるにつれて、個人主義に疑問を抱く政治家や識者の意見が次第に有力になっています。個人主義は利己主義に通ずるものであり、この原則の下で、特に若者が自分の好き勝手に振る舞う風潮が顕著になっているというのであります。そして、こうした風潮を生み出している最大の原因は、わが国の教育、特に公教育の在り方であり、日本の歴史と伝統を軽視し、専ら個人の人権尊重を強調して、「国を愛する心」や公共心を教えていないところにあると指摘するのです。個人主義は、愛国心や公共心を無視した考え方であり、今や日本の社会は無責任主義に陥っているというのです。昨年の教育基本法改正の最終答申で、「日本の伝統、文化の尊重、郷土や国を愛する心」が強調されましたが、私は、ここに個人主義の「揺らぎ」と危機感を覚えるのです。

このような状況を踏まえて、私達は、個人主義をどのように考えるべきでありましょうか。改めて申すまでもなく、個人主義は、「我々国民一人ひとりととって、かけがえない人生を懸命に生きる一個の人間としての尊厳と誇り」を確保するための原則であつたはずですが、しかし、日本国憲法の制定後、人々はひたすら豊かさを求めて経済成長に努力を傾注し、人間の生き方そのものに心を砕いてこなかった。そのため、個人主義は国民の日常生活にまで浸透してこなかったように思うのです。

他面、景気の低迷が長期化し、また、治安情勢が悪くなったこともあつて、戦後の社会システムの疲弊・老朽化が自覚されるようになりました。そして、この十年、社会の仕組み・構造を変えて、この国の社会を蘇らすために、政治改革、行政改革、地方分権の推進、規制緩和といったいわゆる構造改革が推進されています。さらに、今年から始まる司法改革では、法の支配を実質化するための本格的な改革がめざされています。

こうした時、個人主義を改めて問い直し、今こそ国民一人ひとりがその意義を確認し合う必要があると思うのです。そして、国家や社会の利益が個人の利益に優先するといった考え方が復活することのないように、警戒すべきだと思うのです。幸にして、個人主義が一人ひとりの生活や行動にあまねく浸透し、国民の日常生活に定着する気運が少しずつ芽生えつつあります。医療におけるインフォームド・コンセントの確立を契機として、自分の人生や生き方は自分が主体的に決めるのだという考え方が自覚されるようになってきました。私は、これを「個人主義の血肉化」と呼ぶのですが、国民一人ひとりが人格的価値を有する者として、個性を持ち、固有の人生の目標に向かって人生行路を歩むこと、そうした生き方が本当に皆のものとなった時、初めて個人主義の社会に生まれ変わったと言ふべきではないかと考えます。どうか、卒業生の皆さんも、これからの人生を、真摯に、また主体的に生き抜いて戴きたいと思います。

ご卒業、誠におめでとございます。

学ぶ心と新島精神

卒業生に
贈る
言葉



八田英二
大学長

今春、晴れて学士の学位をお受けになった学部卒業生の皆様、そして修士ならびに博士の学位を授与された大学院修了生の皆様に、同志社大学長として心からお祝い申しあげます。これまでの皆様の勉学努力、研究努力に対して深く敬意を表します。その努力が、お名前の刻まれた学位記となって実を結びました。この間、皆様を温かく支え、見守ってこられたご家族をはじめ関係者の方々にも衷心よりお祝い申しあげます。これを機会に、現在の皆様をあらしめて下さった多くの方々に感謝の念を新たにさせていただきます。

同志社大学の前身、同志社英学校の創立は一八七五年に遡ります。創立者新島襄は、その数年後から大

学昇格運動に着手しました。一八八二年に執筆した「同志社大学設立之主意之骨案」がその嚆矢となりましたが、新島の渡米で運動は一時頓挫いたしました。昇格運動への再度の盛り上がりは一八八八年のことです。徳富蘇峰の筆による「同志社大学設立の旨意」が公表されました。毎年の入学式では、その抜粋を高らかに朗読しております。これは皆様の記憶にも新しいかと思えます。新島の死去で昇格運動は中断いたしました。関係者の奔走で当時の専門学校令により大学に昇格したのは一九一二年で、新島の死から二十二年が経過しておりました。さらに大学令により帝国大学と同様の法的認知を得るのは一九二〇年まで待たなければなりませんでした。

同志社大学第一回卒業式は、今から八十七年前、一九一六年七月五日に挙行されています。その式典で、徳富蘇峰は卒業生に祝福演説を贈り、その中で「茲に第一回卒業生を社会に送らんとす。新島先生の靈にして知るあらば如何に満足せられ、如何に諸君を祝福せらるべきか。斯く考へ来る時に我等区々の労の如きは殆ど齒牙に価せず」と述べています。同志社には五棟の国の重要文化財が立ち並んでいます。そのひとつ、同志社礼拝堂の正面座席の中央にはだれも着席しないことが不文律です。そこは新島の座るべき場所と伝えられ、空席となっているのです。同志社のすべてに新島精神は満ち溢れています。皆様には、神の導きで新島が設立に情熱を注いだ大学の誇るべき卒業生であるということを今一度、認識していただきたいと思えます。

「一国の良心」ともいうべき「自治自立の人民」の養成を掲げて新島は数々の教育事業を推進してまいりましたが、病のため一八九〇年に天国に召されました。臨終の二日前、病床で十か条の遺言を遺しました。その一節には「社員たるものハ生徒ヲ鄭重に取扱ふ可き事」、また「同志社ニ於てハ四儻不羈なる書生ヲ圧束せず務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導し以て天下の人物ヲ養成す可き事」とあります。新島の学生へ

の愛情は、生前の最後の言葉、「天を怨まず、人を咎めず」のち、口にした愛唱歌「吉野山花咲くころの朝な朝な心にかかる峰の白雲」に込められています。新島の強い信念は今もなお同志社教育の精神的支柱となり、連綿と受け継がれています。

教育事業を強力に推し進め、新島の理想とした自治自立の人民たる卒業生を社会に送り出すことは、私たち教職員にとって大きな誇りであり、このうえない喜びとするところです。これまでに同志社教育の成果ともいえるべき数十万人の有為な卒業生が大学を巣立ち、実社会のさまざまな分野で活躍しています。

建学の精神のもと、同志社大学は教育事業を通じて、わが国の近代社会の形成に大きく寄与してまいりました。今後とも同志社大学は、この役割をわが国の教育界で率先して果たしていく所存です。同志社大学の教育に対する信念は「良心ノ全身ニ充満シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」という良心碑に込められています。時代を問わず、良心碑は同志社教育の原点です。

二十一世紀に入り四年、時代は混沌の様相をいつそう深めています。この時代に求められているのは、どのような状況でも、つねに自らの生き方を主体的に考える能力をもった人物です。高く理想を掲げ、主体的に問題解決にあたる創造力溢れる人物の育成は同志社大学の教育目的とするところです。近代細菌学の創始者ルイ・パスツールは「チャンスは心の備えある人への微笑み、大発見は成功した好奇心である」と看破しています。心の備えとは、未知の解明に取り組む意欲と地道な研鑽努力です。皆様が同志社大学で身につけられた学術技芸の知識、ここで涵養された独立独行の精神を発揮され、二十一世紀の社会を率先して切り開かれることを心から願っています。

社会に船出される皆様の将来には、穏やかな日もあれば、嵐の吹きすさぶ日もあるかと思えます。出来上りの海図などありません。しかし皆様は強力な羅針盤を手に入れました。ここ私学同志社大学で培われた「学ぶ心」と「新島精神」を見失わず、一步一步着実に人生という海路を進んでください。その際、どんなときでも同志社大学は皆様のことを想い、帰りを温かく待っていることを心に刻んでおいてください。ここは皆様の、青春の原点、人生航路の出発港、そして還るべき永遠の母校です。

最後に、学部卒業生ならびに大学院修了生の皆様一人ひとりの行く末に大いなる期待を寄せて、贈る言葉といたします。

健康に気をつけて 目前の一步を大切に



森田潤司

女子大学学長

めでたく学士の学位を得られました皆さん、また、優れた研究成果を挙げて大学院の課程を修了され、博士あるいは修士の学位を得られました皆さんに、心からお祝いを申しあげます。

卒業の時に当たって、二つのことを申しあげ、はなむけのことばといたします。

その第一は、「健康でありなさい」ということです。これは単純に身体を鍛えなさいということではありません。健康に留意した生活を送っていただきたいということです。

これまでがそうであったように、これからも社会で活躍する基本的な原動力は健康です。その第一歩は不規則になりがちな生活リズムを規則正しく守ることときちんとした食生活から始まります。不規則な生

活リズムは疲れを貯め、体調不調を引き起こし、十分な働きができなくなるなど悪循環のものととなりますが、加えて、若いときの不摂生は、後日、生活習慣病と呼ばれる癌、高血圧、糖尿病などの病気の発症につながることが立証されています。多忙な現代社会の中ではなかなか理想的には行かないでしょうが、少しでもよりよい生活リズムを守るよう心がけましょう。精神的ストレスと上手につき合うことも精神的健康のために心がけなければならないことです。ストレスは罪悪のようにはわれませんが、実はさまざまなストレスが人間を進化させてきた要因であり、人を向上させる要因だともいわれています。適度な精神的ストレスと上手につき合い、自己向上を図りたいものです。

自分の健康は自己責任で守らなければならないことです。どうぞくれぐれも健康に留意した生活を送って頂きたいと思います。

第二は、「目前の一步を大切に」していただきたいということです。これは同志社創立者新島の言葉です。新島はこういつています。「世に処するのには、あたかも霧に包まれた山を登って行くようなものである。目前の一步だけは見える。その一步一步を辿っていくのみである。」（『新島襄言志録』）

新島は世界各地を訪れて土地土地の人物に会い、産業、事物を見聞して、その繁栄のもとにあるものは教育であると気づきます。そして新島はその生涯を教育事業に捧げます。しかし、ご存じのように当時の日本では大方の理解が得られずに苦勞されました。そんな折、新島はどこかの山での体験をもとに自らの大事業遂行にあたっての心構えを言ったのでしょう。

まず、自分の目標を立てることです。自分の立てた目標を達成しようとするには、強い意志、粘り強さが必要です。それらに裏打ちされたチャレンジ精神が必要です。自分の立てた目標に向かって挑戦していく、自分の立てた目標を達成しようとする意欲、それが志です。志を高く持つて挑戦していつてほしいと

思います。

霧に包まれた山の尾根道を歩いて登っているとしましょう。山で霧にまかれるととても不安になるものです。今、世の中は政治も、経済も、科学技術の行く先も不透明です。これまでの経験から予測できない事態が続出しています。霧の中です。しかし、登山経験のある人には分かると思いますが、急峻な尾根道の場合、進むべき道が一本しかないことが多く、道は険しくとも霧の中でかろうじて見える目の前の道を一步一步辿って進めば頂上へ至るものです。信念と勇気をもって大切な一歩を進めてください。

一方、なだらかな尾根道ではどうでしょう。霧の中ではなだらかな尾根道ほどかえって進むべき道を見定めるのがむずかしいものです。何本も踏み跡があり、どの踏み跡も当面は進めます。ところが、中には目標の頂上に至らない踏み跡もあります。どの踏み跡が頂上へ至る道でしょうか。目の前の一歩を踏み出す前の道の選択がむずかしいのです。そんな場合は、地形を見抜く洞察力、地図をみる力、麓で聞いた情報、これまでの経験などあらゆるものを動員して、目の前の一歩を選択し、信念と勇気をもって進むしかありません。

皆さんの中には目標とする山が見つからず、まだ麓に留まっている方もおられるでしょう。目標とする山は決めたが、道がひとつというわけでもなさそうであると感じている方もおられるでしょう。そういう方は、今、霧に包まれた麓や、霧に包まれた、なだらかな尾根道を辿っているときにあたるのかも知れません。

そんな時だからこそ、正しい選択のために必要な感性を磨いてください。経験と事実や事態をつなげる感性です。霧の中で一見どの踏み跡道も同じように思われ、辿るべき道がどれか判断に迷うとき、また霧が深いときは一時待つのも一法です。そのうち一瞬ですが霧が晴れて前が見えることもあります。そこを

これまでの経験などあらゆるものを動員して、目の前の一歩を選択し、信念と勇気をもって進むのです。あらゆる情報や経験を受け入れまとめる力が感性です。そこから判断が続きます。予知能力といわれるもののもとにあるのも感性であろうと思うのです。正しい選択のために必要な感性を磨いてください。

実は、皆さんにはこれから社会に出て行くにあたって頼りになるものがあります。それは一二七年の伝統をもつ本学で取めた学業であり、貴重な青春時代を本学で過ごしたという事実です。自ずと身に付いた自由平等の愛の精神、自立の心、品性と豊かな感性、これらが皆さんの力となります。また、新島がめざした志を共にする先輩や仲間が世界中にいます。それが同志社です。これは幸いなことです。人生に迷ったとき、同志社に連なる人たちが、また同志社に連なる人たちの新たな出会いがきくと皆さんの助けとなるでしょう。山で声を掛け合いながら登るように、お互い声を掛け合いながら目標に向って進みますように。

加えて、見えざる御手が皆さんを導いて下さり、豊かな祝福があるに違いありません。皆に見守られているという、この確固たる事実を心に留めておいてください。信念と自信をもって進んでください。

あなた方が各自一歩を踏み出すとき、それは自ずと新島から託された社会的使命を果たしていることとなります。今その出発の時です。そして、あなた方が輝いて何かの業を成したとき、それがどんな小さなことであっても、同時にきつと誰かが、何かが輝くはずです。

健康に気をつけて目の前の一歩を大切に歩いて歩んでください。

皆さんの前途が実り多いものであるように心からお祈りして、お祝いのごこととします。もう一度、皆さん、ご卒業おめでとつ。